

第16回 現代世界の系統地理的考察

■■ 資源と産業編 ■■

世界の工業を見てみよう (1)

～さまざまな種類や立地～

監修・講師

仲田莉果

学習のねらい

私たちの身の回りにはたくさんの工業製品がある。工業は、原材料を加工して付加価値を加えた製品をつくる産業である。世界の工業生産は、産業革命以降急速に拡大した。軽工業から始まり、鉄鋼や機械などの重工業、自動車や化学製品をつくる重化学工業、そして先端技術産業へと発達した。また、工業は原料産地と市場の位置関係を考え、最も生産費を節約できる場所に立地する。多くの新興国が工業化を進める中、先進国ではより付加価値の高い工業製品を生み出している。

今回のポイント

- 工業の発達と種類
- 工業の立地とその変化
- 世界の工業地域

■■■ 工業の発達と種類 ■■■

工業とは、農産物や工業資源などの原材料を加工して付加価値を加えた製品をつくる産業である。ものづくりの産業とも言われ、元々は少数の製品を手作業でつくる手工業から始まった。18世紀後半イギリスで産業革命が進行すると、機械を導入した工場制機械工業で大量生産が可能になった。繊維工業をはじめとする軽工業が発達すると、大量生産するための大型機械が必要となり、鉄鋼や機械をつくる重工業が成立した。20世紀に入って自動車や化学製品をつくる重化学工業が発達した。近年では、最先端の技術を用いた先端技術産業（ハイテク産業）が急成長し、半導体やコンピュータを生産するエレクトロニクス産業をはじめ、情報通信技術（ICT）に関連した製品の開発が進んでいる。このように、工業は軽工業から始まり、より付加価値の高い製品をつくる工業へと発展していく。

こうした工業の発達に伴い、近代以前におこった伝統産業の中には、時代に合わせて形を変えて成功しているものもある。匠の技と最新の技術・デザインの融合によって、これまでになかった製品をつくり出し、人気を集めている。

■■■ 工業の立地とその変化 ■■■

工業では原材料を工場加工し、市場で販売する。そのため企業は工場を建設する場合、原料産地と市場の位置関係を考え、生産にかかる費用をできるだけ節約できる場所に立地しようとする。輸送費や生産費のように、立地の決定に直接作用するものを立地因子という。これに対して、地形や気候、交通の利便性など、立地に影響する条件を立地条件という。企業は立地

因子を第一に考え、次に立地条件を考えて立地を決定する。

こうした立地による工業の分類は、主に以下の5つが挙げられる。セメントや鉄鋼など原料産地に立地する「原料指向型工業」、ビールや清涼飲料水など市場の近くに立地する「市場指向型工業」、衣服や電気製品の組み立てなどの安価で豊富な労働力を求める「労働力指向型工業」、自動車など関連工場を一定の場所に集める「集積指向型工業」、石油化学製品など交通の利便性を求める「交通指向型工業」である。

立地因子や立地条件は時代とともに変化するため、工業は生産するうえでより有利な場所に移動するようになり、立地に変化が現れる。例えば西ヨーロッパでは、古くから内陸の原料産地に工業が発展したが、原料が海外からの輸入品に置き換わると、輸送に便利な臨海部に立地するようになった。

■ ■ 世界の工業地域 ■ ■

産業革命以降、世界の工業の中心となったのが西ヨーロッパである。石炭や鉄鉱石の豊富なイギリスのミッドランド地方、フランスのロレーヌ地方、ドイツのルール地方などが重工業で繁栄した。しかし1960年以降、石炭から石油へエネルギー転換が進むにつれ衰退し、ロッテルダムなど原料の輸入に便利な臨海部に石油化学工業が立地するようになった。

工業は長い間、西ヨーロッパやアメリカ、日本などの先進国を中心として発達し、発展途上国では目立った工業地域は見られなかった。しかし日本を除くアジア諸国は、第二次世界大戦後、工業化に向けて動き始めた。当初は、輸入していた工業製品を国産品に切り替えようとする輸入代替型の工業化が進められたが、経済発展に結び付かず、1960年代からは輸出向け製品をつくる輸出指向型の工業化が始まった。

1970年代に入ると、韓国・台湾・ホンコン(香港)・シンガポールは積極的な工業化政策によって輸出が増大し、アジアNIEs(新興工業経済地域)と呼ばれるまでに成長した。続いてマレーシア・タイなどのASEAN諸国も輸出加工区や工業団地を造成し、外国企業を積極的に誘致している。また、豊富な資源や労働力を持つBRICS(ブラジル・ロシア・インド・中国・南アフリカ共和国)の工業化も注目されている。一方、先進国では最先端の技術を用いて、より付加価値の高い工業製品を生み出そうとしている。